

ら見るものがあつたシュールレアリズムの話を初めて直接聞いた。そういう話は他の先生は誰もしないから、新鮮だった。難しいという印象はないが、ノートがとりにくい授業であつた。水谷先生の造形理論の本を欲しかったが、まとまった著述はされなかつた。パウハウスは基礎教育の面で効果はあるが発展は難しいと思う。

また、昭和十六年に工芸科鑄金部を卒業した飯田泰造氏によると、パウハウスの構想を聞こうと、鑄金、彫金の学生が自主的に建築科の水谷のもとへ集まっていた。戦時体制がとられ金属がなくなりつつある状況になって、コンクリートを素材にする研究が進み学校でも実践された折りから、機能派という何でも使おうという考え方や素材の活かし方について水谷から話を聞いたのだが、水谷の話から伝統的なものが洗練された外国の息吹を感じとつたという。

水谷はその後昭和十九年に一旦本校を退職したが、二十四年から四十年まで東京芸術大学非常勤講師として「構成原理」を講じた。

② 岡田三郎助の渡欧

昭和五年二月二十八日、岡田三郎助は文部省より欧州各国への出張を命ぜられた。出張に関する上申案（昭和五年職員関係書類^{庶務掛}）には次のように記されている。

案

教官ヲ外國ニ出張セシムル件上申

官氏名 東京美術学校教授（勅任）岡田三郎助

出張地 伊太利國、佛蘭西國、獨逸國、土耳其國、

出張期間 昭和五年四月初ニ出發シ同年九月末還歸スル豫定ニテ

出張ノ目的 約六ヶ月間トス

岡田教授ハ今ヨリ三十餘年前ノ壯時ニ於テ官命ニ依リ四ケ年間佛蘭西國ニ滞在シ西洋畫ヲ研究シ帰朝後本校教授ニ任ゼラレテ現在ニ至ル 現代西洋畫家中屈指ノ巨碩ナリ 近ク十年來我繪畫界ニ勃興セル壁畫ノ研究ニ就テモ同教授ハ夙ニ熱心ナル思索家タリ 現時歐洲各國ニハ其中古ニ偉大ナル發達ヲ為シタル壁畫ノ遺跡ヲ完全ニ保存セルモノ尠カラズ 壁畫研究者ハ親シク之ヲ目覩スルニ非ラザレバ其思索考察ヲ進捗セシメ難キモノアリ 是今回同教授ニ歐洲出張ヲ命ゼラレタキ理由ナリ

出張旅費 本校々館費ノ内ヨリ支給ス

右記載ノ如キ事情ナルニ付岡田教授ニ歐洲伊、佛、獨、土ノ四ヶ國ニ出張ノ御發令相成度此段上申候也

年月日

學校長

文部大臣宛

岡田は同年四月十九日出発（453頁校友会月報記事参照）パリに暫く滞在して三井家の依頼画を制作し、その後大橋了介を伴ってバルカン諸国、イタリアを旅行した。バルカン旅行については自ら「バルカン地方旅行談」（『東京美術学校校友会月報』第三十卷第一号）に詳しく記しており、また、大橋了介著「岡田先生のお供をしてバルカンと伊太利へ」（『画人岡田三郎助』昭和十七年、春鳥会）にはバルカン、イタリア旅行における数々のエピソードが記されている。それらによる

と、岡田はプラハ、ウイーン、ブダペスト、ブカレスト、コンスタンチノーブル、ソフィア、ベルグラード、ヴェネチア、ローマ、フロレンス、パドヴァの順に訪れた。「バルカンの各國には夫々立派な美術館があつて、繪畫等も澤山陳列せられてゐたけれども之は餘り見ないことにして、今度の旅行では、主として考古學的のものや風俗に關係のあるものを注意して見た。」と記している。イタリアでは大橋が「フロレンスではどんな小さなお寺でもフレスコのある處は見て歩かれた。そして繪具屋でフレスコ繪具の色々の種類を集められた。私は先生に神宮繪畫館の壁畫はフレスコでお描きになるのですかと聞いたらいや僕がかうして調べておれば日本で誰れか始めた人があつた時直ぐ役に立つからと云ふお答へであつた。」と記しているように、意欲的に壁畫を見て廻つた様子である。このように一カ月半ばかり旅行して一旦パリに戻り、平福百穂とともにシベリヤ經由で帰国の途に着き、十一月二十五日に下関に到着した。

③ 今和次郎の渡歐

「工藝製作法」授業担当講師（早稲田大学理工科助教授）今和次郎は昭和五年三月一日、欧州各國の美術を研究するために出発、四月七日パリに到着。翌六年一月帰国した。

『東京美術学校校友会月報』第二十九卷第二号には今の手紙が二通掲載されている。第一通目についてはスフィンクスを背景に三木辰夫、松岡映丘、長谷川路可、平福百穂、今和次郎が並んで写っている写真とともに次のように紹介されている。

○在巴里今講師より鈴川〔信一〕教授宛

スフィンクスの前に立つてゐる同窓五人の寫眞をお送りいたします。寫眞の日付は昭和五年三月三十一日です。エジプトはたゞ赤毛布式の見物でした。

偶然にも同じ船に五人も學校出が乗り合せた事は珍らしい事なのです。茶に談話に賑ひました。

船は二月の二十七日に神戸を出た榛名丸でしたが、松岡平福兩先生と長谷川氏は神戸から、三木氏は横濱から、そして小生は門司から、夫々乗船しました。

船中一と月の間に色々通信上げたい事は山々ありましたが、何しろ平福松岡兩先生は今度イタリアへ國賓として行かれるのだといふので、いつも船中での賑はふ中心にされてゐました。途中の寄港地で色々のもが興味がありました。マレー土人や印度人の風俗、熱帯地の風景は感興を與へて呉れました。

少しばかり餘興を書き添へれば、紅海の單調な海を走つてゐる夜、船で假裝會が催されましたが、そのときに本物の印度僧、アラビヤの王様及古代エジプトの女が現はれたかのうまい装ひをしたのが、イタリアー展に行かれる三人の先生でした。船中一同、先生方の風俗研究の行きとどひてゐられるのにあつと云つた次第でした。

地中海を航行中、クリート島の八千尺の山が雪をいたゞいてゐるのが珍らしく見られました。

平福松岡先生と長谷川氏はナポリ上陸、三木氏はロンドン行き、小生はマルセイユに上陸します。〔下略〕